被災地支援活動の取り組み

オケ連ガイドブック

被災地での支援コンサートに向けた
「中間組織」の必要性

発行：公益社団法人 日本オーケストラ連盟
協力：公益財団法人
音楽の力による復興センター・東北

熊本県庁ロビーでの佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラ（SKO）の演奏（2019年）

私たちは、四半世紀の間に、3つの大きな自然災害に見舞われた。「阪神・淡路大震災」（1995年1月17日）、「東日本大震災」（2011年3月11日）、「熊本地震」（2016年4月14日）がそれだ。以降も、各地では大規模な災害が頻繁に発生している。そしてこうした自然災害に対して、私たちは常に受け身であり、そのたびに人々の心の奥には、消し難い傷跡が宿る。

支援活動の共通課題に学ぶ

日本オーケストラ連盟では、2020年2月10日にシンポジウム《音楽の力による心の復興とその支援体制の構築～兵庫 仙台 熊本からのを報告をもとに～》を開催し、5月15日にはその『実施報告書』を資料集として公刊した。そこには、3つの大災害におけるオーケストラなどによる支援の進め方が詳細にわたり報告されている。

そこでは支援内容はきわめてさまざまだが、共通の課題として、被災地（被災者）支援をオーケストラとして現実化するためには、被災地とオーケストラを結ぶ「中間組織」の重要性が報告されている。この「中間組織」の活動が、それぞれの地域でねばり強く実践されることの大切さが再認識されている。

音楽の力による心の復興

東日本大震災のあと、さまざまな分野の芸術家によって被災した各地で支援活動が行なわれた。この芸術活動が大きな励ましになったという声があった一方で、人的・物的被害が大きいなか、「音楽は必要か」「それどころではない」という、芸術による支援活動に「違和感」を感じる人々の声も多くあったという。

演奏者側が被災地に押しかけ、被災者に“芸術の素晴らしさ”を押し付けるような事態は、絶対に避けなければならない。また、被災した各地域はそこに暮らす人々のプライベートな生活空間であり、元来、演奏に特化された場所ではないのであって、その大切な空間が破壊された「厳しい被災現場」であるということを、決して忘れてはいけない。

さてこうしたなかでの支援コンサートは「素晴らしい音楽を聴かせること」が目的ではない。音楽を通じて、被災者が癒しや慰めを得、周囲の人々との交流を創出することにある。

そのためには、被災地と信頼関係を深め、そこでのオーケストラおよび音楽の持つ社会的役割を地元自治体と共有することが求められる。

1 「中間組織」の提案

被災地支援活動の検証から生まれた支援のカギ

オーケストラが演奏会を中心とする平時の活動だけでなく、災害支援に貢献する地域社会の一員としての役割を果たすには、日頃から市民・行政と連携し活動することによって、当該地域の文化振興（教育・指導～地域住民との共演まで）に貢献する実績を積むことが求められる。

一方、災害時は、行政も地域も混乱する。あらかじめ支援活動への取り組みについて行政等との話し合いが行われ、相互連携がイメージされていることが望ましい。この課題を克服するために求められるのが、『実施報告書』に書かれた「中間組織」の必要性である。

被災地と支援音楽家を結ぶ「中間組織」

❶被災地の「心の復興」のためには、被災者のケアをしている地域の方々（個人・組織）や行政、そして演奏家との関係を円滑にするための「中間組織」の設置が有効である。

❷被災地の具体的な被災・復興状況、さらには人々の心の状況は、何よりも被災現場で被災者の支援にあたっている方々が詳しい。

❸地元自治体は、被災・復興の全体状況を数的にも、地域の特性をも把握している。

❹「心の復興」には一定期間を要し、持続的な活動が求められるケースが多い。一時的なコンサートとは区別することが必要である。できれば、あらかじめ地元自治体との信頼関係を構築し、オーケストラの持つ社会的役割を地域の実態に沿って果たすべく、実現可能なプランとして、被災された人々に提供する必要がある。

中間組織の設置や活動をスムーズに進める際に、地方では音楽マネジメントを業務とする個人・組織は少ない。このなかにあって、各地に根ざした38のプロフェッショナルなオーケストラの事務局が持つ機能は、地域では貴重な戦力となる。

ウィーン・フィルによる支援コンサート（2012年 宮城）

「中間組織」の３つのケース

災害時に広域・非営利での活動が期待されるオーケストラの活動と、平時に音楽市場で生きるオーケストラのそれとでは、事業の組み立てから、成果が生まれるまでさまざまな違いがある。

日常的な例でいえば、プロフェッショナルなオーケストラには、営業活動でもある日常が戻れば、結果としてオケによる支援活動が先細りすることが懸念される。また、支援期間が長期に及ぶことによって、地元のフリーランスや全国の音楽家の参加を求める場合は、当該オーケストラのルールだけではカバーしきれない側面も現れる。以下、「中間組織」の３つのケースをあげ、それぞれの課題等を記しておく。

1） 地元オーケストラの対応が可能なケース　～復興期間が比較的短期な場合～

❶演奏事業職員には災害支援コーディネーターとして新たな知見・技術が求められる。

❷活動の運用は当該楽団のルールのもとで行う。

❸当初は地元オーケストラの地域ネットワークを活用。

2） 地元オーケストラから独立した組織が必要なケース ～復興期間が長期にわたる場合

❶活動原資となる寄付・補助金の獲得。

❷庶務・経理などの事務方、コーディネーター等の専門職員の確保。

❸社会的信頼度の高い独立した組織や役員の登用、財務の公開（→透明性の担保）。

❹有償ボランティア制を採用の場合は、交通費などの実費・若干の活動費など、活動継続のための費用が必要。

3) 任意団体の支援組織が活動するケース

❶公的補助金の受給資格などの面から活動原資の確保に困難さが生じる。まさに支援者たちの持ち寄りが原資となるため、活動期間も限定的になることが余儀なくされる。

❷事務方や専門職員の不在は、活動を限定的なものにする。

1)・2) のケースが、支援組織の安定的な在り方と考えられるが、いずれの場合も6〜7頁に図解したような、組織の全体像と「中間組織」の設置によって支援活動の円滑な運営が生まれるのではないだろうか。

② 「中間組織」立ち上げ期の準備

中間組織の具体的な準備事項とポイント

6〜7頁の図表（「中間組織の被災地における位置づけ」）が示すように、「中間組織」は被災地での「心の復興」を目指す支援コンサートを成功させるための中心的な役割を果たす。そのための準備作業として、次のようなことがあげられる。

❶オーケストラ連盟などの助成も併せて、一定の活動基金を確保し、当面の事業継続を可能にする。同時に寄付などの呼びかけも開始する。⇨「呼びかけ文」の準備

❷当該オーケストラの口座とは別の、活動支援寄付用の口座を別途新設する。（オーケストラも被災者である場合、それへの支援との混同の発生を避けることに十分注意する）

❸有識者等の外部人材の参加を求める。代表者・会計責任者は早めに決める。⇨透明性の確保（銀行などの口座名義および印鑑の準備、会計担当者の決定）

❹オーケストラの特性を生かす

○プロの音楽家としての技術、少ない車両で移動できる機動性（電源を必要としない楽器など、オーケストラには災害直後から対応できる能力）が備わっている。⇨具体的には演奏形態の自在性

○地元の被災状況を慎重に検討しつつ、支援コンサートの規模・演奏内容を自在に構成でき、被災者への「寄り添い」を実現することが可能。

復興のプロセスに歩調を合わせる

❶災害の規模が大きくなると、被災した現実を受け入れられない、前を向けない、孤立感が深まるなど、多様な「心の葛藤」が生じる。そうした課題を抱える被災地の現実のなかで、コンサートに望まれるのは、鎮魂・励まし・楽しみ・交流のいずれなのかを慎重に判断する。

❷演奏する側は、演奏する音楽を決めつけず、丁寧なヒアリングと検討を重ね、プログラムを組み立てる。

日本オーケストラ連盟の役割

❶「中間組織」の立ち上げや、運営へのアドバイス
❷立ち上げや、当初の活動に要する資金の支援などに資する基金の造成
❸遠隔地にあるオーケストラからの参加も可能とする仕組み作り
❹コーディネーター、事務方、楽団員、取材カメラマンなどへの研修実施

2011年5月11日　37日間続いた復興マラソンコンサートの最終回（仙台駅西口 アエル）

「心に響く」曲を見極める

クラシック音楽の演奏家が童謡から演歌まで幅広い楽曲に対応できる技量を持つことを知らない人も多い。そのことを伝え、どんな曲を聴きたいか、歌いたいかを探っていく。そのためにも年代・地域など集まる被災者のバックグラウンドも事前に取材しておく。⇨事前のリクエスト調査

打ちとける会話を大切に

支援コンサートでの会話は楽曲やそれにまつわるエピソードの紹介に留まらない。

❶トークを通じて集まった被災者と気持ちを通わせ、和やかな雰囲気を作り出し、被災者同士の交流のきっかけや、活性化に繋げる。

❷共に歌うことはもちろん、体を動かす準備体操や発声練習、お茶やおやつなどの共食も大切。

日々の演奏活動とボランティア両立の仕組み

❶復興が長期に及ぶ場合、無償ボランティアでの支援コンサート継続は大きな負担となる。

❷「中間組織」の事務方への交通費・宿泊費等の実費、若干の活動費の支給が望ましい。⇨持続的な組織の運営に欠くことはできない。

地域の学校公演などの経験を活用

❶いずれのオーケストラも室内楽などを編成し近隣地区の学校・文化施設などに出向くことは日常業務の一部となっている。⇨こうした活動の積み重ねから生まれた土地勘や地域住民との信頼関係は、支援コンサートに取り組むにあたり、重要なインフラである。

❷コンサートを様々な角度から撮影しておくことは、活動やその効果の記録として重要である。可能であれば優れたプロのカメラマンに有償ボランティアでの撮影を依頼すると、その時々の自然な表情が記録できる。⇨記録は貴重な資料になる。

この笑顔も貴重な記録

3 コンサートの具体的な準備

コンサートの要望を募るチラシ作り

○会場は問わず、どこでも行くことを強調。

○誰が演奏するか（○○交響楽団員等の紹介）

○曲目の例 (子供向け、高齢者向け、著名なクラシック曲など）⇨演奏曲目については、過去の被災地コンサートの資料を参考にする。

○「無料」の表示・演奏時間・演奏の画像

○連絡先と主催者の明示

チラシ配布

配布対象 : 行政担当部署・社会福祉協議会・災害ボランティアセンター ·NGO や NPO 団体・避難所の自治会長など (被災者支援団体やお世話役の個人）

打ち合わせ（チェックポイント）

❶演奏依頼が来たら、その依頼者（団体）を訪問し、会場下見と打ち合わせを行なう。

❷必ず現地に赴く。（交通や道路状況、目印等の確認）

❸演奏会場は依頼者の希望を踏まえ、相談の上決定。

❹会場の環境の確認事項

音の響き方・室温（空調設備の有無）・照明および外光・周辺から騒音（車の往来、時報代わりの有線放送、学校のチャイムなど）・床の素材（演奏用の靴は履けるかどうか）・座席配置・控室（着替えができるかどうかで衣装選択が変る）・登退場の動線・トイレ・電源の有無（楽器によって）・駐車場の有無

❺予想される来場者について訊く（被災の状況・年齢層・職業・地域の文化・ご当地ソングや民謡など）

＊職業・地域については、個人情報に近い地域情報なので配慮が必要

❻リクエスト（曲名やジャンルなど）を訊く。要望に100%応えられるわけではないことも伝える。

❼選曲や話題として避けるべきことなども確認する。

＊参考 : 公益財団法人 音楽の力による復興センター・東北の場合、『海』『浜辺の歌』『椰子の実』『故郷』『青葉城恋唄』『花は咲く』など、海や亡き人を想起させる曲はしばらく避けていた。

打ち合わせの情報を整理・共有

依頼者名・連絡先・開催日時・会場・コンサート名称／開催趣旨・主催／共催／協力者／出演者と編成・当日スケジュール・会場の様子（靴履き可能か、床の素材、マイクの有無等、画像を添付する）／控室（鏡の有無、施錠可か）・駐車場の有無・予想される来場者の人数と年齢層・近所にコンビニはあるか , などを一覧表にしておく。⇨８頁『支援コンサート整理票』参照

演奏家への演奏依頼と概要伝達

❶可能であれば、その土地にゆかりのある演奏家に依頼する。

❷「クラシック音楽は苦手」と思い込んでいる人へのアプローチを考える。また専門外の音楽（演歌等）

をリクエストされることもある。プロの衿持を持ちつつ、参加被災者の希望に歩み寄りたい。

○唱歌・歌謡曲や演歌・映画音楽・ジャズ・地域の民謡・テレビドラマ主題歌・アニメソング

○手拍子・足拍子・身振りなど身体を動かす要素を取り入れた曲（気分が明るくなり、場が和む）

○みんなで歌う曲（歌うことは心身に良い影響をもたらす。但し、無理強いはしない）

4 当日までの準備

❶着用する服装の色など

○服喪の時期が過ぎたら、プログラムも雰囲気も希望を感じさせるほうがよい。オーケストラの楽団員は黒い服装になりがちなので気を付ける。

○会場のカーテンやカーペットの色の情報も演奏家に伝えておく。

❷コンサートのチラシを作り、必要部数を現地の各担当者に届ける。

❸掲示ポスター、回覧板用チラシ、戸別配布用チラシ等、依頼者の希望に合わせて作成する。

❹場合によっては災害公営住宅等にポスティングすることもあるが、必ず許可を得てから作業する。

❺開催までのあいだ、必要に応じて随時、現地の窓口となる担当者と連絡を取る。

❻当日配布のプログラムや歌詞カードを用意する。

❼一緒に歌うための歌詞カードは配布するタイミングを演奏家に確認する（最初に配布するか、サプライズとして使用直前に配布するか）。

役場庁舎でのコンサート（2016年 熊本「炊き出しコンサート」）

5 コンサート当日の動き

準備

❶椅子並べや室温調整など、演奏家の到着までに可能な限り環境を整えておく。

❷高齢者は開場時刻よりだいぶ早く来場することがあるので、その対策を考えておく（掲示をする、別室で待っていただく、演奏家の許可を得て客席で待たせてもらう、など）

❸最前列に座るのを恥ずかしがる人が多いので、無理強いはせずに誘導する（例:「特等席ですよ」「見やすい席です」など）

演奏本番

❶演奏者は演奏することだけに終始せず、お話しを交えて進行する。高齢者が多い会では、ゆっくり、はっきり話すことを心掛ける。

❷記録カメラマンが入る場合には、シャッター音や足音、立つ位置などに配慮し、鑑賞の妨げにならないよう指示する。＊音楽を専門としていないカメラマンには事前のお願いが必要だろう。

終演後

❶可能であれば、演奏家もお客様のお見送りや茶話会等に参加して交流を図る。

❷現地の担当者と話し、感想や改善点などを聞く。

事後の整理

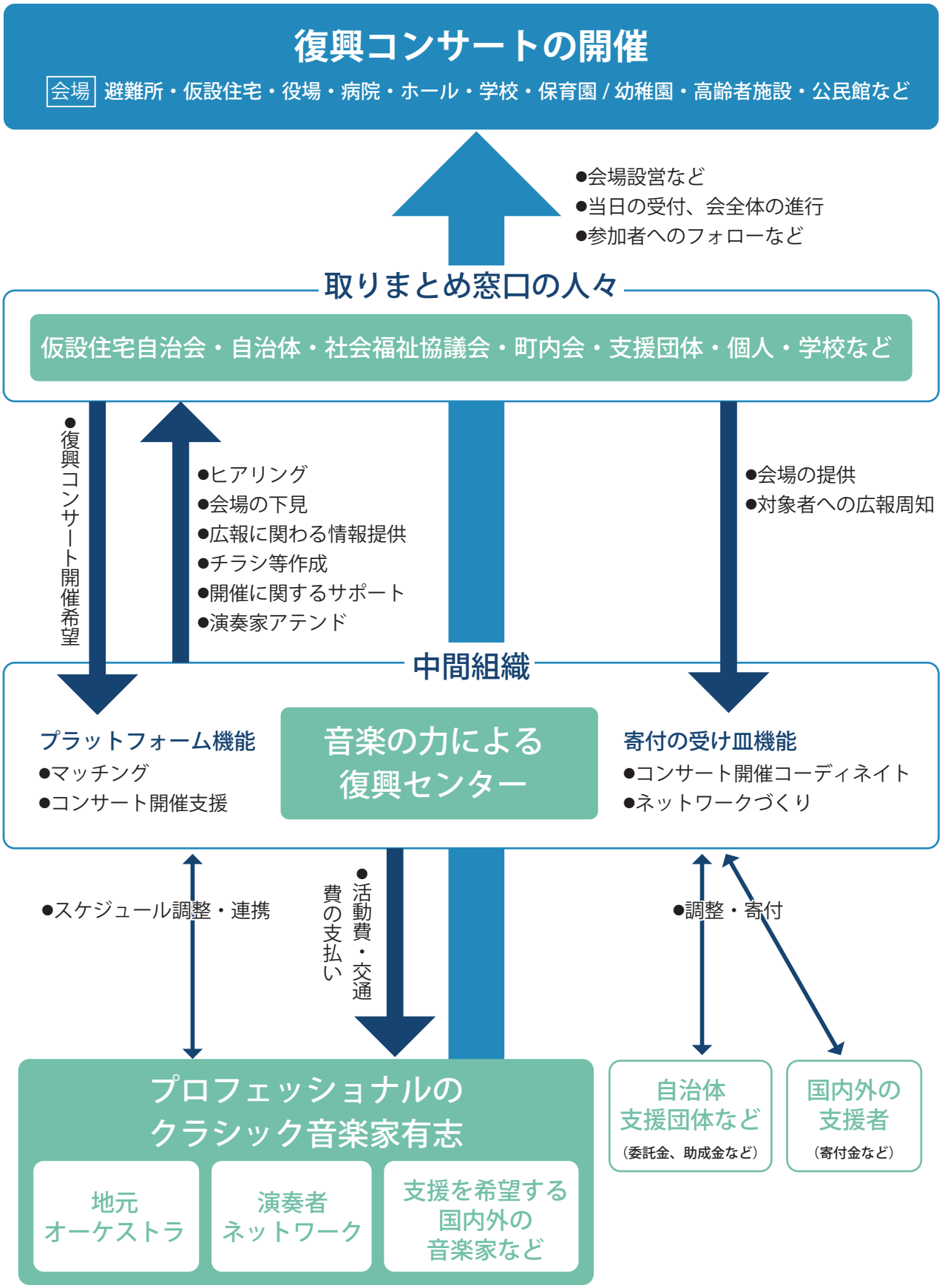
❶開催概要や写真データ等を整理して記録する。

❷可能であれば、現地の担当者に来場者のその後の反応などを聞く。

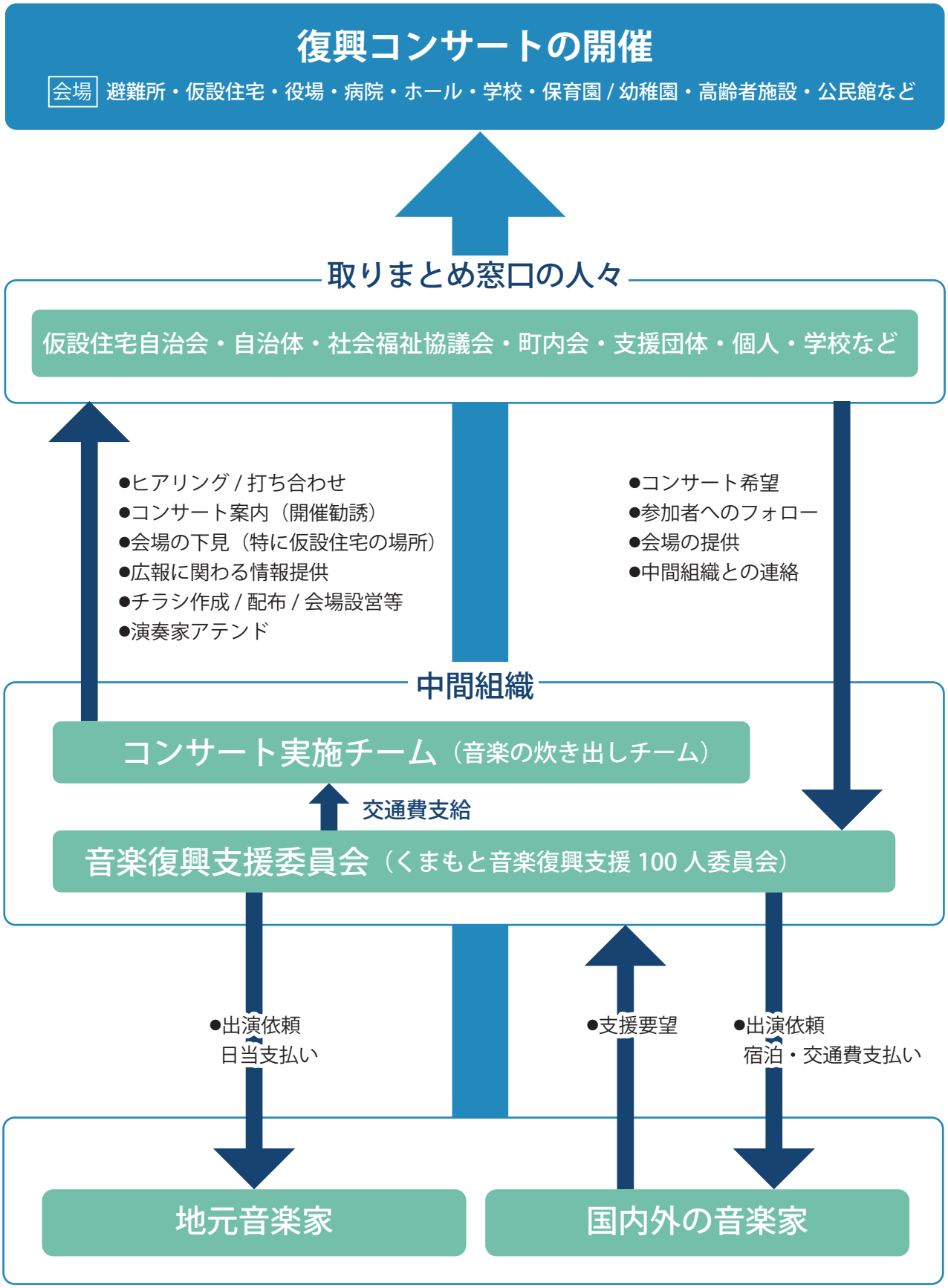
❸原則として、JASRAC への事前手続を行う。（非営利目的の作品使用については、「音楽著作権法第 38 条」により「営利を目的としない公演等」として使用料が免除される。ただし、演奏料を演奏家や団体に支払う場合や入場料が発生する場合は、免除対象には該当しない。）

❹会計報告の作成

【東日本大震災モデル（公益財団法人）】



【熊本地震モデル（任意団体）】



整理の参考資料

支援コンサート整理票（記入例）

受付日：　◎◎年◎月◎◎日　受付者：＿◎◎◎◎◎＿＿＿

項　目	概　要		
申込み 団体･個人	◎◎◎仮設住宅自治会	連絡 担当者	自治会長 ◎◎◎◎さん
連絡先	TEL：0000-00-0000　　FAX：なし　　E- mail: なし 住所：◎◎県◎◎郡◎◎町大字◎◎　◎◎◎仮設住宅◎号室		
対象者分類	☑　A　被災者対象または被災地域での開催 ☒津波被害　☒宅地被害　☒家屋損壊 ☒応急仮設住宅　□みなし仮設　□災害公営住宅 □教育機関　□その他（　　） □　B　被災者対象ではないが震災復興支援 □被災地支援チャリティ　□その他（　　） □　C　追悼や再開記念など（　　）	備考 世帯数◎◎。 参加者はおもに 70 代以上、20 名程度を予想 女性が主で、男性は数名。 出身地域はさまざま。	
開催日時	◎◎年◎月◎日（◎）開演◎◎時◎◎分～終演◎◎時◎◎分（演奏◎◎分　）		
会　場	名称：◎◎◎仮設住宅集会所 住所：◎◎県◎◎郡◎◎町大字◎◎　　電話：　なし		
コンサート 名称	◎◎フィルメンバーによる　秋ののんびりコンサート		
開催趣旨	◎◎仮設住宅には、県内のあちこちから避難してきた地縁のない方々が生活している。 住民同士の交流を深めるきっかけにしたいと自治会長から演奏の依頼があった。		
主催など	主催＝◎◎◎仮設住宅自治会 共催＝◎◎フィル/◎◎◎支援サポートセンター 協力＝◎◎町社会福祉協議会/日本オーケストラ連盟		
経費負担	☑◎◎フィル活動費　□謝礼あり（　　） ☑助成あり（◎◎県災害復興助成事業　　）　□その他（　　）		
特記事項	一人暮らしの高齢者が主。クラシック音楽にはあまりなじみがない。カラオケサークルでは氷川きよし、美空ひばりなどが人気。ご当地ソングの『◎◎音頭』は誰でも知っている。交流サロンで季節の歌を歌っている。聞いてみたい曲『庭の千草』『旅愁』		
出演者	☑　◎◎フィル楽団員（　2　名） ☑　◎◎フィル楽団員以外（　1　名） 編成：フルート◎◎◎◎　チェロ◎◎◎◎ ピアノ◎◎◎◎	会場進行 09：00　スタッフ入り 09：25　演奏家到着 09：30　リハーサル開始 10：25　リハーサル終了 10：30　開　場 11：00　開会あいさつ 11：05　演奏開始 12：00　演奏終了 →のち、茶話会あります 12：30　全体閉会	
その他	打合せ　◎月◎◎日　担当者=◎◎◎◎ ・控室（隣接の備品庫）冷暖房　あり →施錠　可　(不可)　姿見　なし ・駐車場（　◎　）台 ・MC用マイク→　あり　(なし) ・演奏時の靴は→畳の和室なので靴ナシで。 ・ピアノ→　有　(無)　不要（調律＿＿＿） ・電子ピアノ持込み→　(要)　不要 ・近くにコンビニ等　あり　(なし)		

※「支援コンサート整理票」は、オケ連のホームページからダウンロードしていただけます。

発行:公益社団法人 日本オーケストラ連盟
〒130-0013 東京都墨田区錦糸1-2-1 アルカセントラル棟7F
Tel:03-5610-7275 http://www.orchestra.or.jp/